

《姨捨》試解 — わが心
なぐさめかねつ —

飯塚 恵理人

《姨捨》は「わが心なぐさめかねつ更科や をばすて山にてる月を見て」と言う「古今和歌集¹」などに見られる和歌を素材とした「老女物」の能である。月を見る老女の亡霊はなお「慰めかね」る「執心」を持っているのだが、老女が何に「執心」しているのかということについては、議論がある。例えば《姨捨》の主題について、小西甚一氏²は「『姨捨』は、山奥に捨てられて亡くなった老女の執心をモチーフとするが、その執心は、自分を捨てた家族への恨みとか人間世界への憎しみとかいった種類の悲痛陰惨なものでなく、むしろ生前にながめて心を愉しませた景色、特に月光の美しさへの愛着なのである。古歌にもうたわれた更科の名月を、風雅の心ある都人と共にもういちどながめ、夜遊の興を尽くしたいと

いうのが、後シテを現われさせた執心の内容にはかならない。」と言われる。本稿では、老女の「執心」とワキの都人との関わりから、この《姨捨》の狙いを考えてみたい。

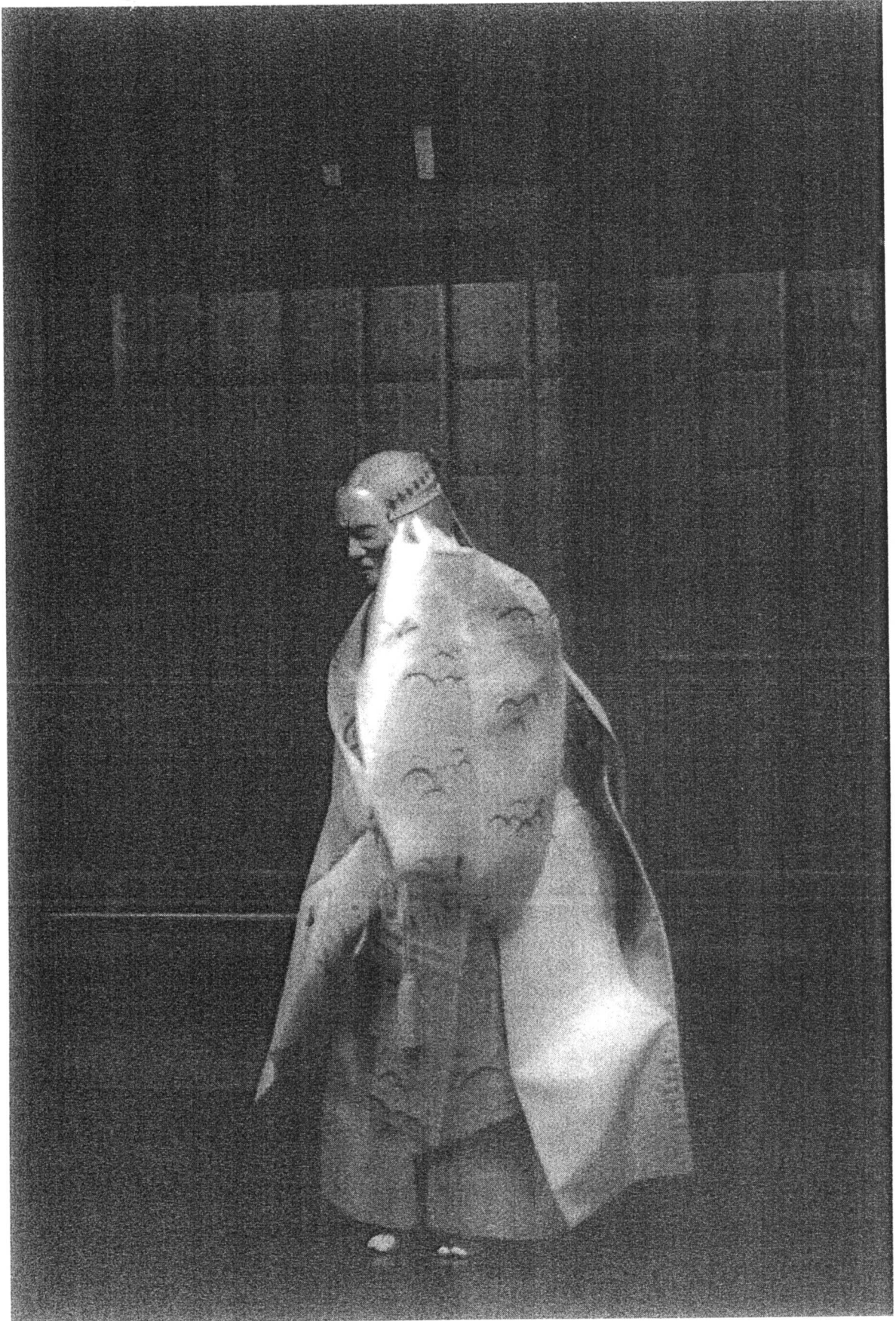
まず「月」を見る行為と姨捨山は、謡曲に先行する和歌・説話等でのように扱われてきたのか、それをこの曲の「主題」「狙い」を考察する上の参考とすべく見て行きたい。《姨捨》の老女は、「山」に捨てられ、屋外で月を見ている。和歌においても更級の「月」は、本来屋外で見るべきものであった。「三十六人撰³」の中務（一四四番）には「さらしなにやどりはとらじをばすての山までてらす秋のよの月」とある。屋外にいるという状況のみで言えば、「月に誘われて」であつても「捨てられて」で

あっても変りはない。信州の秋の屋外での月見は、本当

はとても寒いものであるうし、まして現実に「捨てられた」状況であればなおさら厳しいものであるう。しかし文芸のなかの「更級の月」は寒さや厳しさを感ぜさせるものではない。片桐洋一氏⁴は、「平安時代から中世にかけてよまれた『更級』をばすて山」などの歌を見ると、かような老人遺棄の話は全くといってよいほどにかかわっていない。たとえば『月影は飽かず見るとも更級の山の麓に長居すな君』（拾遺集・別・貫之）は、信濃国の月がどんなに美しく飽くことのないものであっても彼の地に長居せず帰って来てほしいという心であり、『いづこにも月は分かじをいかなればさやけかるらむ更級の山』（千載集・秋上・隆源）は、月はどこでも同じであるはずなのに、更級の山の月だけがどうしてこんなにさやかなのかといっているのであって、いずれも更級を月の名所としてとらえているだけなのである。と言われる。老女は「捨てられる」ことによって屋外で名月を見ている状態であり、その状況のみならば悲痛陰惨ではなく羨まれる存在である。このような中古・中世の「和歌」の世界における姨捨山の理解の上に、『姨捨』も成り立っている

と考えられる。

では老女の執心を本文を追って見てゆきたい。上掛かり系諸本ではワキは都から出て、姨捨山の月を眺めようと志している風流な男である。里の老婆に「姨捨の在所⁵」がどこであるのかと尋ね、それが「木高き桂の木」であることを教えられる。「姨捨山の亡き跡と 問はせ給ふは心得ぬ わが心なぐさめかねつ更科や 姨捨山に 照る月を見てと 詠めし人の跡ならば これに木高き桂の木の 蔭こそ昔の姨捨の その亡き跡にて候へとよ」と述べる。都の男は老女の墓標の前で、捨てられて亡くなった老女の追体験をしようとしている。それは、前掲の隆源の和歌のように特に美しいと言われる更級の月を見たいということに他ならない。《忠度》では桜、《松風》では松、《隅田川》では柳の木が、いずれも墓標であるが、《忠度》《松風》においてはその木そのものが亡霊の執心と密接に関わっている。《姨捨》においても「桂」という「月」と関わりの深い木が墓標とされている点で、「月」が執心に深く関わっていることを示している。またこれが「木高い」ので、舞台上の現在は老女の死から相当に時間が経っていることが知られる。この老女は



梅若万三郎《姨捨》大阪公演 平成14年11月2日 於 大阪能楽会館
写真提供 財梅若研能会

「執心の闇」を晴らそうと今夜現れている。「月」と「執心」という関わりで言えば、『無名草子』は「花・紅葉をもてあそび、月・雪に戯るるにつけても、この世は捨てがたきものなり。」と、「花・紅葉・月・雪」をこの世に心を繋ぎ止める、執心の原因となるものとしてあげる。そして特に「月」については、「同じ心なる友なくてただひとり眺むるは、いみじき月の光もいとすさまじく、見るにつけても恋しきこと多かるこそ、いとわびしけれ」と『同じ心なる友』と見る月の感慨深さを述べる。「この世にも、月に心を深く染めたる例、昔も今も多く侍るめり。」とあるが、『姨捨』は「昔」の老女の幽霊と「今」の「都人」という、「同じ心なる友」と見る月の素晴らしさを理解する」時空間を超えた二人の出会いを舞台上に表現している。

都人が月を待っていると、老女の幽霊が登場する。老女の幽霊は「昔に返る秋の夜の 月の友人円居して 草を敷き 花におき臥す袖の露の さもいろいろの夜遊の人に いつ馴れ初めて現なや」と、「月の友」とともに月を眺める。そして老女は「また姨捨の山に出でて 面をさらしなの 月に見ゆるも恥づかしや」と述べる。この

詞章は『申楽談儀⁷』の記事に載る部分で、ワキに対して自分が幽霊として現れたことを恥ずかしく思うという内容になっている。通常の能であれば、自分が執心を持つていることを僧に対して「恥ずかしい」と述べる。ここでは、「執心」を持つていることを「俗」にいる「都人」と、死後も姿を見せることになった「月」に対して「恥ずかしい」と述べていることになる。この都人も「月に染みて明か」す人であるから、老女はその「執心」が彼には理解できると考えているのだろう。

「老女」が「捨てられた」場所は素晴らしく月の美しい場所であった。であるから「老女」を「捨てた」行為は文芸上残酷な行為として非難されるようなものではなかった。老女は月の美しさに魅入られて「わが心」の和歌を詠む。この状況を背景としてこの和歌を理解するならば、「自分の心を慰めることはできない。今更級の姨捨山に照る月を、月の友人とともに眺めても、この無上の楽しみをこの世で永遠に続けることは出来ないのだから」となる。老女は名月に魅入られたままその場で亡くなった。「捨てられた」ことよって老女が手に入れた名月の夜は、死んでなお幸福な思い出として残った。その

幸福を求める「執心」によって老女は成仏することが出

来ず、仲秋の名月の夜ごとに「月の友」を求めて「姨捨

山」に現れることとなった。ワキの都人との夜遊は、月

を愛でる気持ちを共有する現世での月見の楽しみを再現

している。老女がこの夜遊で満足し、成仏できたかとい

えば、ますます「月」への執心が募り成仏できないと考

えるのが自然であろう。この老女が成仏できるのは、こ

の世で月を見るのもつまらないと思うことができる時で

ある。但し、この「幽霊」は、この世での「幸せ」を忘

れられずにさまよっている霊であって地獄に落ちて苦し

んでいる霊ではない。このような「幸福」に執着する幽

霊が登場する曲には《井筒》、《錦木》がある。《井筒》

の場合、業平を「待つ」ことによって帰りを「待ち得る」

ことが出来た幸福を、《錦木》においては、錦木を立て続

けたことよって思いの叶った幸福をテーマとしており、

シテはそれ故に成仏できない。世阿弥作の夢幻能におい

て、幸福感に執心をもって成仏できない霊は、《井筒》《錦

木》ともに地獄に堕ちるといふ形では語られず、その場

所に永遠に留まるといふ形で書かれている。《姨捨》の老

女の幽霊も、この二曲と同じタイプの幽霊であると言え

るだろう。

注

1 『古今和歌集』 小島憲之・新井栄蔵校注 新日本古典

文学大系⑤ 岩波書店 平成元年2月20日発行 二六

五頁

2 「作品研究『姨捨』」 小西甚一 「観世」 第三十七卷

九号 観世会編集 昭和45年9月発行 五頁

3 「三十六人撰」 樋口芳麻呂校訂 『新編国歌大観』 第

五卷』 歌集所収 角川書店 昭和62年4月発行 九一

二頁

4 『歌枕歌ことば辞典増訂版』 片桐洋一著 平成11年

6月発行 笠間書院 一八七―一八八頁

5 《姨捨》の本文は、『謡曲集 上』（伊藤正義校注 新

潮日本古典集成 新潮社 昭和58年3月発行 二三五

頁―二四四頁）による。

6 『無名草子』 桑原博史校注 新潮日本古典集成

新潮社 昭和51年12月発行 一五―一六頁

7 『世阿弥 禅竹』 表章 加藤周一 日本思想大系②④

岩波書店 昭和49年4月発行 二六九頁

8 「《井筒》と中世『伊勢物語』古注釈 — 「待つ女」等の解釈を通じて —」拙書『夢幻能の方法と系譜』

雄山閣 平成14年3月発行 一八三—二〇三頁

補記 本稿は「梅若万三郎襲名記念能」（於大阪能楽会館平成14年11月2日）の「紫明の会」鑑賞ツアーの折の解説の講義ノートを改稿したのになります。解説の場を与えていただきました、故中西通先生に心より感謝申し上げます。

（いづかえりと・梶山女学園大学助教授）